



2018. 3. 30

No.206

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

年間送料込み1,000円

1部 100円

2018, 3, 16

雪解けのデントコ
ーン畑に集まるマ
ガンとオオハクテ
ヨウ（むかわ町）

春は空からそうして土から微（かすか）に動く

石牟礼道子さんを偲んで



一気に雪解けが進み、北海道も春らしくなりました。クロッカスが咲き、フキノトウが顔をだしています。

石牟礼道子さんが2月10日、90歳で亡くなりました。水俣病の実相に迫った「苦海浄土」は、私の生き方を変えた本でした。世界に例をみないほど大規模な公害となった水俣病。その被害者である漁民たちの運動や患者たちの苦悩・希望を克明に描いています。亡くなって改めて読み直して、すごい本だと思いました。

石牟礼さんは、言葉すら発することができなくなった患者たちの魂の声を聞き、聞き書き以上の真実をとらえたのです。「奎は、こやつあものをいいきらんばってん、人一倍、魂の深か子でござす」「あねさん、魚は天のくれらすもんでござす。天のくれらすもんを、ただで、わが要ると思うしことって、その日を暮らす。これより上の栄華のどこにゆけばあろうかい」（第4章「天の魚」）。「うちは、こげん体になってしもうてからいっそうじいちゃん（夫のこと）がもぞか（いとしい）とばい」（第三章「ゆき女きき書」）

魂の声は、極限にあっても輝きを失わない人間の尊厳を伝えています。ここに描かれているのは人間だけではありません。

「みしみしと無数の泡のように、渚の虫や貝

たちのめざめる音が重なりあって拡がってゆく。それは海が遠くて、満ちかえしてくる気配でもある。優しい朝。ニワトリが啼く。」

（第五章「地の魚」）

大多数の繁栄のために一部の地域が犠牲になり切り捨てられる構造も告発しています。今、事故後の福島で起きていることと同じではないかと思いました。

私は当時、東京で臨床検査技師になる専門学校で学んでいましたが、この本を読んで公害をなくす仕事をしたいと、大阪の某企業の産業衛生部に入りました。工場の公害分析の仕事でしたが、企業は労働者の健康は守らないことを嫌というほど味わいました。北海道に帰り旭川医大病院が開院するまでの期間、大学の公衆衛生教室の分析助手としてバイトしました。そんな時に石狩川水銀汚染問題が起きたのです。公衆衛生教室に持ち込まれたウグイの水銀値を測る仕事をしました。当時公衆衛生教室に助教授として赴任されたのは土井陸雄さんでした。東京都の公害研究所にいらして、東京・水俣病を告発する会でも活動されていました。私も「大雪と石狩の自然を守る会」から独立した「石狩川の水銀をなくす会」の設立にも関わり、市民運動をしました。ここで、市民も科学することの大切さを学びました。行政や企業を変えていくのは市民だと実感しました。1979年3月、もっと水俣病を知ろうと旭川でユージン・スミスの写真展「水俣」を開催しました。私はその時、そうそうたるメンバーから「なんでも応援するから実行委員長になって」と乗せられて大役を引き受けました。土井さんの人脈で、若くて愛らしい石牟礼道子さん、医師の原田正純さん、患者運動のリーダー川本輝夫さん、胎児性水俣病の坂本しのぶさんをお呼びすることができました。

私の心の支えだった石牟礼さん。4月15日、東京でのお別れの会に行ってきます。

櫻井よしこ氏が自身のウソを認める！ 「捏造決めつけ」記述にも重大な誤り

次回7月6日に結審、判決は秋以降に



札幌訴訟の第11回口頭弁論が、3月23日札幌地裁で開かれ原告植村隆氏、被告櫻井よしこ氏に対する長時間の本人尋問があった。

この尋問で、櫻井氏は、いくつかの記述に誤りがあることを認めた。この記述は捏造決めつけの根拠となるものであるため、植村氏に対する誹謗中傷が根も葉もないものであることがはっきりした。櫻井氏本人がウソを認めたことにより、櫻井氏の根拠は大きく揺らぎ、崩れた。櫻井氏はその一部については訂正を約束した。

傍聴券交付に252人の列

尋問は午前10時30分から、植村氏、櫻井氏の順で行われ、午後5時前に終了した。両氏が法廷内で向かい合うのは第1回口頭弁論（2016年4月）以来2年ぶり。裁判大詰めの場合での直接対決となり傍聴希望者は最多記録の252人。抽選のために並んだ列は地裁1階の会議室からあふれて、エレベーターホールへと伸びていた。63枚の傍聴券に対する当選倍率は4.0倍となった。関東や関西、九州から前日に札幌入りした植村支援者もこれまた最多の20人ほど。一方で、櫻井氏側の動員によると思われる人たちの姿もいつになく目立った。

満席となった805号法廷は、開廷前から熱気とともに緊迫した空気に包まれた。弁護団席に、植村氏側は34人が着席した。東京訴訟弁護団からは神原元・事務局長ほか6人も加わっていた。櫻井氏側はいつもと同じ7人と新たに2人の計9人。いつもは空席が目立つ記者席は15席すべてが埋まった。傍聴席最前列の特別傍聴席には、ジャーナリスト安田浩一氏、哲学者能川元一氏のほか新潮社やワックの関係者の姿もあった。

午前10時32分、開廷。裁判長が証拠類の採否を告げた後、植村氏に証言台で宣誓をするように促し尋問が始まった。尋問の前半は植村氏、後半は櫻井氏。自身の弁護団に答える主尋問、相手側からの質問に答える反対尋問という順で行われ重要な争点についての考えが明らかにされた。この中で、櫻井氏のこれまでの言説には重大な誤りや虚偽があることがはっきりした。

植村氏の尋問

植村氏は1991年当時の記事執筆の経緯と捏造決めつけ攻撃による被害の実態を詳しく説明した。質問は植村弁護団若手の成田悠葵、榊井妙子両弁護士が行った。主尋問は淡々と進み予定の1時間で終わって昼休みに入った。

午後1時、再開。植村氏への反対尋問が始まった。質問したのは、浅倉隆顕（ダイヤモンド社）安田修（ワック）、野中信敬（同）、林い

づみ（櫻井氏代理人）、高池勝彦（同）の5弁護士。尋問は1時間40分にわたった。質問が集中したのは、植村氏が記事の前文で「挺身隊」「連行」という用語を使ったこと、また本文でキーセン学校の経歴を書かなかったことについてだった。このほかに、記事執筆の開始・終了時間や、慰安婦関連書籍の読書歴、関連記事のスクラップの仕方など争点とは直接関連のない質問も繰り返された。

植村氏は終始ていねいに答えたが、「吉田証言」についてのやりとりで、怒りを爆発させる場面もあった。

朝日新聞社は、1997年に「吉田清治証言」（濟州島で「慰安婦」を狩り出したとの証言）について調査チームを作り検証作業を行った。当時ソウル特派員だった植村氏もチームに加わり、濟州島での調査結果メモを提出した。安田弁護士はそのメモについて、2014年に朝日新聞の慰安婦報道を検証した第三者委員会の報告書は「あなたの調査はずさん、という表現をしている」と言った。ところが同報告書には植村メモについて「徹底的な調査ではなかったようである」と書かれているものの、「ずさん」という表現は一切ない。

植村氏は、「名誉棄損裁判の法廷で名誉棄損発言をするのですか」と激しく抗議した。安田弁護士は植村氏の剣幕に圧されて「怒らないで下さい、謝ります」と述べ、そのまま尋問を終えてしまった。廷内のあちこちから失笑と溜息が聞こえてきた。

主任弁護人格の高池弁護士は、これまでの弁論ではほとんど発言しなかったが、今回は質問に立った。しかし、慰安婦問題や植村氏の記事について深く踏み込んだ質問はなかった。意外だったのは、植村氏が朝日新聞を早期退職して大学教授を志した理由や、植村氏が東京と札幌で提訴したことなど、訴訟の基本的な情報についての質問だった。植村氏が自由な立場で研究と著作活動ができる場として大学教授の道を選んだこと、バッシング当時も現在も札幌市の住民であることを伝えると、高池弁護士は怪訝な表情を浮かべた。初めて知った、という表情に見えた。

植村氏の反対尋問が終わった後、岡山忠広裁判長とふたりの陪席裁判官から植村記事の「（女子挺身隊の）名で」「連行」の意味、韓国内での「挺身隊」という表現や吉田証言の韓国内での影響などについて、質問があった。植村氏の尋問は午後2時50分に終わり10分間の休憩に入った。

櫻井氏の尋問

午後3時、再開。櫻井氏の主尋問が始まった。櫻井氏は、林いづみ弁護士の質問に答え慰安婦問題に関心を持つようになったきっかけと基本的な考え、これまでに行った取材や研究内容を語った。自身の著述や発言に誤りがあるとの指摘についても釈明し、「間違いですからすみやかに訂正したい」と述べた。朝日新聞の慰安婦報道については、「海外で

日本の評価を傷つけた」との持論を繰り返し、植村氏の記事についても「意図的な虚偽報道だ」とのこれまでの主張を繰り返した。主尋問は45分で終わった。

続いて植村側の川上弁護士が反対尋問を行った。川上弁護士は、櫻井氏の著述の問題点を具体的に指摘し、取材や確認作業の有無を徹底的に突いた。ゆっくりと柔らかい口調はまるでこどもを諭す小学校教師のようだが、中身は辛辣なものだった。刑事事件を多く手がけてきたベテラン弁護士ならではの面目躍如である。

川上弁護士は、櫻井氏が書いた記事やテレビ番組での発言を突き付け、櫻井氏が主尋問であらかじめ認めていた間違いについて、畳みかけた。「ちゃんと確認して書いたのですか」「どうしてちゃんと調べなかったのですか」「ちゃんと訂正しますよね」。櫻井側弁護団はその都度、証拠書面の提示を求めた。証言台上の書面を確認し終えた櫻井側弁護士は、自席に戻らずにそのまま立ち続けた。川上弁護士は「いつまでそばにいますか、証言誘導の誤解を招きますよ」と指摘した。そうこうするうちに、櫻井氏の声はだんだんと小さくなっていった。

櫻井氏が間違いを認めたのはこういうことだ。

月刊「W i L L」2014年4月号（ワック発行）、「朝日は日本の進路を誤らせる」との寄稿の中で、櫻井氏は「（慰安婦名乗り出の金学順氏の）訴状には、14歳の時、継父によって40円で売られたこと、3年後、17歳で再び継父によって北支の鉄壁鎮というところに連れて行かれて慰安婦にさせられた経緯などが書かれている」「植村氏は、彼女が継父によって人身売買されたという重要な点を報じなかっただけでなく、慰安婦とは何の関係もない女子挺身隊と結びつけて報じた」と書き、植村氏を非難した。しかし、訴状には「継父によって40円で売られた」という記述はない。「人身売買」と断定できる証拠もない。なぜ、訴状にないことを持ち出して、人身売買説を主張したのか。誤った記述を繰り返した真意は明かされなかったが、世論形成に大きな影響力をもつジャーナリスト櫻井氏は、植村氏の記事を否定し、意図的な虚偽報道つまり捏造と決めつけたのである。

川上弁護士は、櫻井氏がW i L Lの記事と同じ「訴状に40円で売られたと書かれている」という間違いを、産経新聞2014年3月3日付朝刊1面のコラム「真実ゆがめる朝日新聞」、月刊「正論」2014年11月号への寄稿でも繰り返したことを指摘。さらに、出演したテレビでも「BSフジプライムニュース」2014年8月5日放送分と読売テレビ「たかじんのそこまで言って委員会」2014年9月放送分で、同じ間違いを重ねたことを、番組の発言起こしを証拠提出して明らかにした。これらの言説が、植村氏や朝日新聞の記事への不信感を植え付け、その結果、ピークに向かっていた植村バッシングの火に油を注いだ構図が浮かび上がった。

櫻井氏、訂正を約束

では櫻井氏はなぜ「訴状に40円で売られたと書かれていた」という間違いを繰り返したのか。

櫻井氏はジャーナリスト臼杵敬子氏による金学順さんインタビュー記事（月刊「宝石」1992年2月号）が出典であるとし、「出典を誤りました」と主張した。櫻井氏はこれまでに提出した書面でも、「宝石」の記事で金さんが「平壤にあった妓生専門学校の経営者に四十円で売られ、養女として踊り、楽器などを徹底的に仕込まれたのです。ところが十七歳のとき、養父は『稼ぎにいくぞ』と私と同僚の『エミ子』を連れて汽車に乗ったのです。着いたところは満洲（ママ）のどこかの駅でした」と語ったことを根拠に「親に40円で妓生に売られた末に慰安婦になった」と主張してきた。だが、川上弁護士は、「宝石」の記事で、櫻井氏の引用部分の直後に、こういう記述があることを指摘した。

「サーベルを下げた日本人将校二人と三人の部下が待っていて、やがて将校と養父の間で喧嘩が始まり『おかしいな』と思っていると養父は将校たちに刃で脅され、土下座させられたあと、どこかに連れ去られてしまったのです」

つまり、櫻井氏が「出典である」と主張する「宝石」にも、養父が40円で売って慰安婦にしたという「人身売買説」の根拠となる記述はどこにもない。むしろ、養父も日本軍に武力で脅され、金さんと強引に引き離されたという証言内容から、櫻井氏が強く否定し続けてきた日本軍による強制的な連行を示す記述があるのだ。

この直後部分をなぜ引用しなかったのか。川上弁護士は、櫻井氏が自身の「人身売買説」に都合の悪い部分を引用せず、植村氏の記事を捏造と決めつけたことのおかしさを指摘した。そして、「櫻井さんは、訴状にないことを知っていて書いたのではないですか」などと述べ、同じ間違いを繰り返した理由を厳しく問い質した。櫻井氏は「訴状は手元にあり、読んで確認もしたが、出典を間違った」と、弁解に終始した。川上弁護士が紙誌名を逐一挙げて訂正を求めると、櫻井氏は「正すことをお約束します」と明言した。ただ、テレビについては「相手のあることなので」と語り、約束は保留した。

実は、この問題は2年前からくすぶり続けている。2年前、第1回口頭弁論の意見陳述で植村氏は、W i L Lと産経新聞の「訴状に40円で売られたと書かれている」という間違いを指摘、「この印象操作はジャーナリストとしては許されない行為だ」と批判した。そして、櫻井氏は口頭弁論後の記者会見で「ジャーナリストですからもし訴状に書かれていないのであるならば、訴状に、ということは改めます」と誤りを認めた。しかし、W i L Lでも産経新聞でも、訂正しなかった。そのため、植村氏は2017年9月、東京簡裁に調停申し立てを行い、産経新聞社に訂正記事を掲載するように求めている。その審理はまだ継続している。

櫻井氏が間違いを認めたのはこれだけではなかった。「週刊ダイヤモンド」2014年

10月18日号。「植村氏が、捏造ではないと言うのなら、証拠となるテープを出せばよい。そうでもない限り、捏造だと言われても仕方がない」と櫻井氏は書き、その根拠として、「(金学順さんは)私の知る限り、一度も、自分は挺身隊だったとは語っていない」「彼女は植村氏にだけ挺身隊だったと言ったのか」「他の多くの場面で彼女は一度も挺身隊だと言っていないことから考えてこの可能性は非常に低い」と断定している。

この記者会見は1991年8月14日に行われた。韓国の国内メディア向けに行われたので、朝日新聞はじめ日本の各紙は出席していない。植村氏も出席していない。しかし、記者会見で金学順さんはチョンシンデ(韓国語で「挺身隊」)をはっきりと口にしている。それは、韓国の有力紙「東亜日報」「京郷新聞」「朝鮮日報」の見出しや記事本文にはっきりと書かれている。櫻井氏はこの点について「これを報じたハンギョレ新聞等を確認した」と述べている。たしかにハンギョレ新聞には「挺身隊」の語句は見当たらない。しかしそのことだけをもって断定するのは牽強付会に過ぎるだろう。川上弁護士は、韓国3紙の記事反訳文をひとつずつ示し櫻井氏の間違いを指摘した。櫻井氏は、間違いを認めた。櫻井氏の取材と執筆には基本的な確認作業が欠落していることが明らかになった。

櫻井氏の22年前の大ウソ

川上弁護士は最後に、櫻井氏の大ウソ事件について質問した。

1996年、横浜市教育委員会主催の講演会で櫻井氏は「福島瑞穂弁護士に、慰安婦問題は、秦郁彦さんの本を読んでもっと勉強しなさいと言った。福島さんは考えとくわ、と言った」という趣旨のことを語った。ところが、これは事実無根のウソだった。櫻井氏は後に、福島氏には謝罪の電話をし、福島氏は雑誌で経緯を明らかにしているという。

「なかったことを講演で話した。この会話は事実ではないですね」「福島さんには2、3回謝罪しました。反省しています」「まるっきりウソじゃないですか」

「朝日新聞が書いたこともまるっきりのウソでしょう」

最後は重苦しい問答となった。こうして、70分に及んだ櫻井氏の尋問は終わった。櫻井弁護団からの補強尋問はなかった。裁判長からの補足質問もなかった。

尋問終了後、岡山裁判長は今後の進め方について双方の意見を求めた上で、次回口頭弁論で結審すると宣言した。閉廷は予定通りの午後5時だった。

次回開催日は7月6日(金)開廷は午後2時。この日、最終弁論で双方がまとめの主張を行って審理は終結し、9月以降に予想される判決を待つことになる。

会見、集会でも櫻井氏にきびしい批判

「幕切れの朝日ウソつき発言は櫻井氏の捨て台詞、悲鳴だ」(秀嶋弁護士)

「植村氏への非難がみごとに櫻井氏自身に帰ってきた」(能川氏)

「デマと捏造、安倍政権の提灯持ちの櫻井氏、水に落つ、だ」(安田氏)



裁判報告集会は午後6時30分から、札幌駅近くの北海道自治労会館4階ホールで開かれた。朝からの本人尋問の傍聴を終えた人、傍聴券の抽選に外れた人、仕事を終えた市民ら約170人が参加した。

最初に、前札幌市長の上田文雄さん(植村裁判を支える市民の会共同代表)が挨拶。「前回の証人尋問に出た喜多義憲さん(元北海道新聞記者)と同じジャーナリスト魂、同じ思いを、植村さんがきょうの法廷で示していた。市民の目、耳、頭脳となるジャーナリズムが、民主主義を育て、自由、人権を守っていくのだと思う」。続いて、本人尋問を担当した弁護士3人が順に、尋問で引き出そうとしたねらいなどを説明した。櫻井氏の反対尋問をひとりで行った川上有弁護士は、「櫻井は本件に関してあちこちで書き、発言しているが、十分な調査をしていないことは明白だった。それを明らかにする資料がどれだけ集まるかが勝負だったが、支援グループにリクエストしたら次々に集まった。それらを整理し客観資料を振り分けるだけで、彼女のウソや不十分な調査が浮き彫りになった」と、尋問の舞台裏の一端を明かした。

植村隆氏は「厳しい反対尋問を覚悟していた。被告側の弁護士は私への質問を共有していないようだった。私の名誉を棄損しようとした弁護士もいた。朝日新聞の第三者委員会報告で、吉田証言についての私の調査が『徹底的なものではなかったようである』とあったのを、彼は『ずさん』といった。即座に反論したが、黙っていたら、『ずさん』が事実とされてしまうところだった」と語った。

対談「ネット右翼はいま…」では、哲学者能川元一氏とジャーナリスト安田浩一氏が、旧来のイメージとは様変わりした「右翼」の



能川元一さん

危険な現状を語り合った。能川、安田両氏とも対談の前、朝から夕方までこの日の裁判すべてを傍聴した。その感想を、対談の冒頭で次のように語った。能川氏「櫻井さんが植村さんに言ってきた、ずさんだとか捏造だ、に事実誤認が

あることが動かしがたく明らかになった。植村さんに対して投げかけてきた非難がみごとに櫻井さん自身に帰ってきた尋問だった」



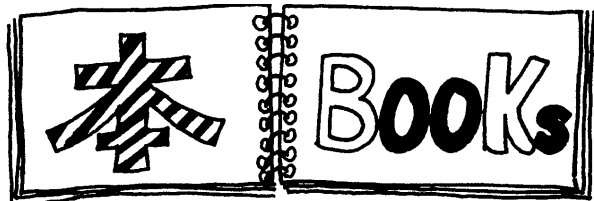
安田浩一さん

安田氏「櫻井さんは安倍政権の代弁者、というより提灯持ちだ。提灯持ち水に落ち、という言葉もある。主人の足元を照らしているうちに、自分の足元が見えなくなって、気がついたら水に落ちていたということだろう。日本社会を良くしていくためにはデマと捏造は許さない。

そのことを、植村さんの弁護団は法廷で示してくれた」

記者会見で秀嶋ゆかり弁護士は「被告側は、連行＝強制連行、挺身隊＝勤労挺身隊に引き付けようとする尋問だった。40円問題は、櫻井さんが繰り返し書いたりテレビで発言しており、その都度確認していないことが鮮明になった。22年前の講演会の架空発言を認め、朝日新聞もウソをついたでしょ、と尋問の幕切れで答えた。そう言うしかない櫻井さんの捨て台詞、悲鳴のように感じた」と語った。

記者会見は紙面の都合で秀嶋弁護士の発言のみです。植村裁判を支える会ブログ<https://sasaerukai.blogspot.jp/>をご覧ください。記事の転載は了解を得ています。撮影：石井一弘さん



地図から消される街
3.11後の「言ってはいけない真実」
青木美希



地図から消される街
3.11後の「言ってはいけない真実」

青木美希著 講談社現代新書
994円

3,11から7年。報道が少なくなる中、避難指示解除が進んだ福島第一原子力発電所近隣地域で進む恐るべき事態とは？ 朝日新聞記者の青木美希さんが、被災した人びとや、除染作業に従事する人々などに、取材を重ね現場に足を運び記録した真実です。

メディアを通して見せかけの「復興」が国や自治体で叫ばれ、実際には、町の消滅を防ぎ戻れる人は戻るとい自治体の「町残し」ばかりが進み、人が消えていく実情をリアルに報告しています。

7年たっても、復興は名ばかりです。浪江町はいわき市に近く、父の生前に私も訪れたことがありました。ここは避難指示解除されて1年たっても病院も介護施設もないと書きます。当初は南相馬、いわき、二本松の3市に避難者が集団で暮らす町外コミュニティを作る計画があったとあります。チェルノブイリでも実践されて、安心した暮らしを送っていると聞きます。

多くの住民は「第一原発から溶け落ちた核燃料を取り出せた後でない、危険でとても帰還はできない」と反対しているのに、国も町も住民の命を守ることは考えていません。帰還した人は解除から10ヶ月後でも311人と2パーセントにとどまっているのも、当然でしょう。

ある作業員は除染作業を誇りの持てる仕事だと思っていました。ところが、沢の除染で葉や土を集めずに「川に流せ」と手抜きを指示されたと証言しました。青木さんは現場に出向き、動画に撮り記事にしました。また榎葉町の住宅街では手抜き除染が行われていました。しかも危険手当も支給されていない作業員が多くいました。

どのページからも、まやかしの「復興」がリアルに浮かび上がってきます。住宅提供の打ち切り後も都内に残った避難者の生活困窮が深刻です。公害かくしをした水俣病ととても似ていると思いました。青木さんは社会が「忘れる」ことが被害をより深刻にしていると訴えます。渾身のルポです。



あの夏、兵士だった私
96歳、戦争体験者からの警鐘

金子兜太著 清流出版
1620円

戦後俳句を代表する俳人の金子兜太さんが、2月に98歳で亡くなりました。

金子さんは悲惨な戦争体験者として、生涯反戦と平和を訴え続けました。「安倍政治を許さない」という文字を揮毫し、国会前のデモにはたくさんのプラカードが掲げられたのは記憶に新しい。私の手元にも意思表示としてのカードがリュックにあります。

原点は南洋のトラック島に出征した戦争経験でした。爆撃や飢えで、非業の死を遂げていく部下の姿を見て、この死を無駄にすることはしないと決意したことが語られます。

〈水脈（みお）の果て炎天の墓碑を置きて去る〉。敗戦を迎え、九死に一生を得て引き揚げる時に詠んだ句でした。

復職した日本銀行では組合活動に専念。俳壇の革新にも取り組みました。原郷の秩父を愛し、土とともに生きる大切さを語っています。

ある公民館が、反戦をうたった女性の俳句を不掲載にしたときは、怒り抗議しました。自由にものが言えない社会は、人間の尊厳を否定し、戦争への道だと考えたからです。

自由を愛し、日常に流されずに生きる心のありようを定住漂泊とも呼びました。熊谷市に住んでいましたが、その地に秩父の自然を重ねていました。〈曼珠沙華どれも腹だし秩父の子〉の句があります。おおらかな作風に温かさを感じました。俳句の世界もいいですね。



ようこそ、難民！
100万人の難民がやってきたドイツで起こったこと
今泉みね子著 合同出版社
1620円

夏休みの終わり、マックスが公園で出会った「言葉をなくした少年」は、シリアからにげてきた難民でした。宗教や習慣のちがいが、テロ事件の恐怖におびえて「難民は出ていけ」と叫ぶ大人たち。マックスは心ゆれつつも、難民のタミムが描いた、涙でにじんだ「お母さんと妹の絵」が頭からはなれなません。100万人とも、120万人ともいわれる大量の難民がおし寄せたドイツで起こったことを、ドイツに住んで35年になる環境ジャーナリストの今泉みね子さんが、少年の目を通して描きました。

マックスの家族は、過去の歴史に向き合います。難民に否定的な祖父は、「難民の受け入れは不公平だ。ドイツ人の職場を奪う、外国語ばかりが聞こえてくる国には住みたくない」と言います。それらは一般的な世論のようです。家族と対話を重ねていると祖父が「戦争でドイツが負けて、旧ドイツ領に住んでいて本土に向かって逃げた」体験を語ります。「国がはじめた戦争で、苦しむのは普通の市民だということを忘れてはいけない」と語る場面がいいです。マックスは、自分がもしタミムやアフミンのようにシリアやイラクで生まれていたらと想像してみるのです。突然、戦争が起きて、爆弾を落とされて、住む家もなくなったことに思いを寄せます。本書は対話によって不安や対立を克服できることを教えてくれます。

ドイツはホロコーストを引き起こした負の歴史に向き合い、その反省から「ドイツ基本法」を作りました。基本法には『政治的に迫害されている者は、庇護権を有する』と書かれています。「どの国の人かに関わらず、政治的に迫害されているすべての人々は、自分を守ってほしい」とドイツに申し込む権利をもっていること」という文章を読んで素晴らしい国だと思いました。

日本は難民に冷たい国です。2万人近い難民認定申請者がいるながら、認定はたった20人だとか。私たち市民にも異質なものを受け入れない空気があるのではないのでしょうか？

ドイツ連邦議会の首相指名選挙でメルケル首相が4選しました。ドイツの良心を見ました。難民問題をどうしたら解決できるのか考える好著です。

礼文短歌 蕊（しべ）

杉田美野里著 北海道新聞社
1620円



礼文島に家族で移り住んで25年、植物写真家として活動する杉田美野里さんが、かれんな

花々の姿に心情を重ね合わせた写真短歌集です。

美野里さんは、思いがけなく一昨年、肺がんと診断され右上葉を切除しました。その後礼文島から月に一度札幌の病院に通いながら治療を続けています。

美野里さんは「命に限りがあることを意識する時、より感性がピンと張ってくるのを感じます。それをいつでも受け止めてくれたのが短歌でした。心が大きく揺れてしまった時も、短歌を作ろうと文字を紡いでいるうちに、気持ちが落ち着いてくるのを感じます」とブログにつづっています。

写真と短歌のハーモニーがとても素敵。人の命は限りがあるけれど、美野里さんが撮影してきた花々や自然は、1万年も前からの約束であり記憶でした。「きみが吾の蕊を訪ねる約束は 一万年も前からのこと」「とわとわと 花野を歩み沈みゆき 眠るこの身を 想うことあり」の歌に胸が締め付けられました。自然保護を通じた長い友人です。



写真集 エゾナキウサギ

ナキウサギふあんくらぶ編
共同文化社 1944円

エゾナキウサギがチングルマヤ、ベニイタヤの花を

くわえている姿は愛らしく、心がなごみますね。まるで詩人のようです。

ふあんくらぶのみなさんが、この姿をひたすら待ち続けて撮影されたのかと思うと、ナキウサギからのご褒美にちがいありません。まるっこい小さな体、愛らしい瞳にみつめられたら、守ってあげなければと思います。氷河期からいのちを繋いできたエゾナキウサギを絶滅させてはならないとの思いが、心から湧き上がってきました。

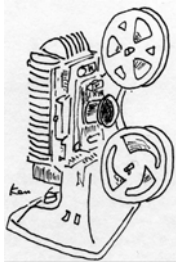
トムラウシでも富良野岳でも、姿は見えずとも、エゾナキウサギのピィッ、ピィッ、ピィッといかん高い声に励まされて登ったことを思い出します。

紹介したい本や、アーサー・ビナードさんの講演録なども掲載したかったのですが、今号は植村裁判の詳細に紙面を割きました。この裁判は、弁護士、植村隆さん、事務局、支援者と総力を上げて準備を進めてきました。長い報告ですが是非お読みください。（み）

購読料と寄付ををありがとうございます
(敬称略) 2.10~3.26

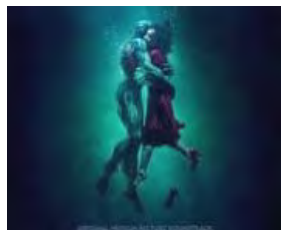
守田恵美子/高橋儂/尾寄弘子/内田篤のり/石井たか子/吉川かほる/福田光子/近美千代/松浦幸子/但馬桂子/久野真紀子/藤田トシ子/吉根由紀子/中村京子/小川早苗/高嶋道/木村玲子/菅邦子/匿名/森隆子/林心平・恭子/喜多義憲(著書も)/林恒子/三露久男/塩川哲男(切手)/今泉みね子(著書) 合計 53,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。引き続きご支援をお願いします。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535です。

シェイプ・オブ・ウォーター



ギレルモ・デル
・トロ 監督

1960年代
の冷戦下のアメ
リカが舞台。政
府の研究所で清



掃員として働く女性と、アマゾンから研究所に連れてこられた不思議な生きものとのラブストーリー。

イライザ（サリー・ホーキンス）はアマゾンで神のように崇拜されていたという彼（ダグ・ジョーンズ）にすっかり心を奪われ、こっそり会いに行くようになります。幼少期のトラウマで声が出せないイライザでしたが彼とのコミュニケーションに言葉は不要で、二人は少しずつ心を通わせていきます。そんな矢先、イライザは彼が実験の犠牲になることを知ります。言葉がなくても二人が五感すべてを使って愛を交感する姿がファンタスティック。

イライザを助けるのはゲイの隣人ジャイルズ（リチャード・ジェンキンス）や黒人の同僚ゼルダ（ドリームでも好演したオクタヴィア・スペンサー）。一般社会の中で異端とされる人たちが、命を踏みにじる権力者に立ち向かいます。映像も音楽もステキ！間違いなく傑作です。肉体的・精神的に疎外感を抱えたマイノリティたちへ向ける監督の眼差しの温かさが心にしみました。

第90回アカデミー賞授賞式で作品賞・監督賞を獲得しました。



希望のかなた

アキ・カウリスマキ
監督

シリア内戦から逃れてフィンランドにやって来たカリード（シェ

ルワン・ハジ）は難民申請をしたものの受け入れられるかどうか分からず、内戦でただひとり生き残った妹とも道中ではぐれてしまいます。

一方、フィンランド人中年男のヴィクストロム（サカリ・クオスマネン）は妻と別れ、衣料品店もたたみ、あまり流行っていないレストランのオーナーに落ち着きます。二人の接点などなさそうでしたが、強制送還から逃げ出し、行き場を失ったカリードが一夜のねぐらに選んだ場所は、ヴィクストロムのレストランのゴミ捨て場でした。

不法滞在となったシリア人青年を、無条件で自分のレストランに雇い入れるオーナー。警察の手入れの時も、従業員たちは何も言わずに協力して彼を匿います。仏頂面の登場人物たちのさりげない優しさや心遣いが一つ一つバトンを繋ぎます。それが人間として当然のことだと。

不法滞在者となった彼を、何事も無かったかのように自然と受け入れて見せる一般市民の懐

の深さを実に淡々と描いてみせてくれました。

スリー・ビルボード

マーティン・マク
ドナー 監督



財務省が森友学園との国有地取引に関する公文書改ざんしたのは、安倍首相に忖度したと誰もが思ってい

るのではないのでしょうか？ 民主主義を破壊するものです。

「スリー・ビルボード」は痛快なぐらいストレートに、「私は絶対に許さない」という気迫のこもった映画でした。

ミズーリ州エビングという架空の田舎町を舞台に、7カ月前に何者かに娘をレイプされて殺されたミルドレッドは、事件の捜査が進展しないことに痺れを切らし、解決のきっかけをつかむために強攻策にでます。地元警察の捜査怠慢を訴えるメッセージが書かれた、挑発的な広告は地域社会で軋轢を生み、次々に事件が起こります。娘を亡くした喪失感や悔恨、他者への攻撃性に隠された果てしない孤独。一言では言い表せない感情をフランシス・マクドマンドが熱演しました。警察署長役のハレルソンは抑制のきいた演技で根幹を支え、警察官ディクソンを演じたのはサム・ロックウェルです。ディクソンは深く考えずに差別をし、職権を乱用します。しかしある出来事をきっかけに社会に対する認識が変わり、自分の言動を見つめなおします。ミルドレッドとディクソンがあらんかぎりの力で壁にぶつかっていく、不器用で正直な生き方に、いつの間にか共感している自分がいました。ダークなユーモアを織り交ぜつつ、予測不能のストーリー展開で、固定観念にとらわれず、常に真実を追求し、悪にどう立ち向かうべきかを私たちに考えさせます。

広告の余波でひどい暴行を受けて入院するはめになった人物が、顔もわからないほど変わり果てた姿となったディクソンと病室で対面する場面でのやりとりは、痛々しくて可笑しくて、そして切なさに溢れています。オレンジジュースのストローをちょっと迷いながらそっと傾けるシーンに、思わず胸が熱くなりました。

誰にも忖度せずに映画を製作することの出来るアメリカの懐の深さも感じました。

第90回アカデミー賞ではフランシス・マクドマンドが主演女優賞、サム・ロックウェルが助演男優賞を受賞しました。



3,16 日高山
脈をバックに
飛翔するオオ
ハクチョウと
マガン

北の桜守

滝田洋二郎監督

終戦直後、樺太から北海道引き揚げを通して「桜守」とは何を守る人かを問いかけます。終戦の年に生まれ、生きてきた吉永小百合の120本目の出演作です。



太平洋戦争終結間近、当時日本人が暮らしていた樺太にソ連軍が侵攻したことから、現地に残る夫との再会を約束し、息子を連れて逃げてつ（吉永小百合）の様子から始まります。それから15年後、アメリカに渡って成功し、米国企業の日本社長として帰国した息子の修二郎（堺雅人）がてつを訪ね、すれ違いながらも、共に生きていく姿を描きます。修二郎は、日本でオープンしたホットドッグストアの経営で多忙な中、桜の木に話しかけるなどおかしな言動が目立つてつの様子に異変を感じ、一緒に過ごした記憶を拾い集めるように、てつと北海道の各地を巡る旅に出ます。

樺太からの引き揚げは苦難の連続。網走の流氷、疎開船が沈む海、飢えと寒さに震える原野をひたすら歩く姿。現代と当時の引き揚げが交互に描かれます。

樺太の見える海で、てつの心が壊れる瞬間が悲しい。幸せになってはいけないと思いつつに寄り添う人たちの温かさに救われます。修二郎は母の苦しみを受け止め、命の重みを知るのです。

桜を守るてつの眼差しには平和を守りたいという願いがあふれていました。

戦闘シーンや自決場面は舞台劇で表現することにより、残酷さを和らげています。実は戦争映画で殺しあうシーンが大の苦手です。こういう表現が増えてほしいです。

蛇足ですが、私は吉永小百合の名作といえば高校生の時に観た「キューポラのある街」しか思い浮かびませんでした。でも今回の映画に込めた平和への祈りがまっすぐに伝わってきて、是非紹介したいと思いました。

ザ・シークレットマン

ピーター・ランデズマン監督

1974年のニクソン米大統領辞任を招いたウォーターゲート事件。ワシントン・ポスト紙が事件の真相を暴いたことで、ニクソン米大統領は失脚しました。

FBI副長官フェルトが自身の家族やキャリアそして将来をも危険にさらし、全てを犠牲にしてまで真相を暴くまでに至った経緯を映し出します。

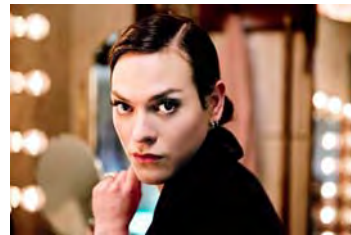
FBI内の混乱やホワイトハウスとの攻防にとどまらず、フェルトと家族との関係も丹念に描かれます。



妻はストレスから情緒不安定になったり、父に反発して娘が家出していたりと決して幸せとは言えない状況にあっても家族に心を寄せ続けます。

私はフェルトが、娘には真実を追求する父でありたかったからだったのではと思えてなりませんでした。FBIとしての忠実さを保ちつつ上官の圧力に屈しない姿が圧巻でした。

フェルトを演じたのが93年のアカデミー賞映画「シンドラーのリスト」の主演リーアム・ニーソンです。すっかり痩せて同じ俳優とは思えませんでした。



ナチュラル・ウーマン

セバスティアン・レリオ監督

愛するオランダに最期のお別れがしたいと、周りの差別や偏見と闘うトランスジェンダー、マリーナの物語です。亡くなった恋人オランダの家族から手ひどい暴力や差別を受けても、社会からの向かい風にも、どしゃ降りの雨にも屈せずマリーナは前に向かって歩きます。その強さの源は、オランダへの愛と、自分の心を貫くという決意でした。ウェイトレスをしながらナイトクラブのシンガーとして歌うマリーナを、南米チリで歌手、女優として活躍するダニエラ・ベガが演じました。ダニエラ自身もトランスジェンダーであり、マリーナを差別する人々に「私は人間」と言い放つシーンでは演技を超える真実を感じます。マリーナが歌うヘンデルの歌曲「オンブラ・マイ・フ」にはオランダへの限りない愛と感謝が込められ、胸がいっぱいになりました。



グレイテスト・ショーマン

マイケル・グレイシー監督

「レ・ミゼラブル」で華麗な歌声を披露したヒュー・ジャックマン主演のミュージカル。

貧しい家に生まれた夢想家のバーナムは、小人症の人、髭の濃い女性、痣を持った人など、それまで世間で隠れるようにして生きていた人々を集めて、奇想天外なショーを作り上げます。そのバーナムを支えるのが、彼の妻、幼なじみであった名家の令嬢チャリティでした。歌・ダンス・カメラワーク等、全てが素晴らしく、ストーリーには愛が感じられます。人生の紆余曲折を経たバーナムが、人生の喜びはお金や名誉ではなく、仲間との友情、家族の愛だと私たちに語りかけてくるようで、そのハートウォーミングな余韻にいつまでも浸っていたい気持ちでした。